

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心

No.576

木に彫り、絵にした仏像を生身の仏であると思念していくと、ただちにそれは生身の仏となる。
(蓮如)

△解説▽インドやパキスタンの博物館では携帯用の小さな仏像が見られる。仏像を描いた懐紙大のものもある。懐に入れて、仏に守られるという信仰があったようだ。これは生身ではなくても、つねに持ち歩くうちに、己の身と血が通う生きた仏となると蓮如はいう。

田上太秀・駒澤大名義教授

2017.6.15 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.575

仏道を学ぼうとする人は、たとい道心がなくても、善人に近づき、よい御縁によって同じことを何度も聞いたり見たりしなくてはならない。(道元)
△解説▽何事もその道を学ぼうとする人は、己の環境を整えることが大切である。愚者と付き合わないこと。善人と付き合うと、思いも寄らない賢人との縁ができる。善人や賢人の話を何度も繰り返し見聞きしていると、その道と真摯に向き合うようになる。

田上太秀・駒澤大名義教授

2017.6.14 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.578

大慈とはあらゆる生類に楽しみを与えることであり、大悲とは生類の苦しみを抜くことである。(『大智度論』)

△解説▽生類を愛し、彼らを悩まし害するものを取り除き、利益をもたらすことが「慈」である。一方、生類が苦しみに打ちのめされ、だれ独り寄り辺のない人を見て、堪えられない気持ちから苦しみを取り除こうとするのが「悲」である。この慈悲の心が「和」の心である。

田上太秀・駒澤大名義教授

2017.6.17 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.577

一切の存在は空であり、特徴のないものであり、願い求めるものでないと理解し、智慧の完成を求めるべきである。(『般若経』)
△解説▽ものは種々の要素から作られたのである。これという特徴がない。よって願って求めるほどのものは本来ない。みな作られたもので、いずれ壊れ、消え去る。この世にあるものは無常であり、思うようにならず、己のものなどなにもないと知るべきである。

田上太秀・駒澤大名義教授

2017.6.16 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心

No.580

時が来てはじめてなされる努力は、なすべき事をなさないものである。あらかじめなされる努力こそ、なすべき事をなすのである。

（『ミランダ王の問い』）

△解説▽公共施設といえは要望があつて作られたものだが、古代インドのアショーカ大王（前3世紀ころ）は民衆のためを思い、菓草栽培、病院の建設、街路樹の植樹、信教の自由などを進んで施策した。これがあるから始められる努力である。泥棒が入ってから施錠するのではない。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.6.19 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.579

先になすべき事柄を後でしようとする者は、安楽の場所から落ちて後悔する。

（『テラガーター』）

△解説▽唐の李白は「天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり」と詠んだ。人間は万物の一つで、天地の間に一時の宿りをしているにすぎない。いましなげばならないことを後回しにするのは、宿泊客が去った後でもてなしを疎かにしたことを後悔するに似ている。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.6.18 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.582

善心が起こるのも、過去になした善行の招く結果であり、悪事をしようと思ふ心が起こるのも、過去になした悪行のはたらきによる。

（親鸞）

△解説▽仏教では、前世の善悪の行爲が習慣となつたものの名残を人は持つて生まれていると説く。名残を宿業といひ、現世で悪行をはたらくのは、その人の宿業の名残である。はやく仏法を学び、正しい信仰生活を送るようにと教えている。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.6.21 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.581

知慧のない者には注意がない。注意がない者には知慧がない。注意と知慧をもつ者は、涅槃に近づく。

（『清浄道論』）

△解説▽注意は心を平静に保ち統一すること。なにごとをするにもつねに呼吸を整え、心を統一することである。統一し、注意する人は世の道理を熟知し、ものの実相を洞察する力（知慧）を得る。この人は無上の安楽（涅槃）を得るだろうという。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.6.20 中村元記念館協力